

犬 猫

を拾ったら

を拾ったら

神獣 聖獣

で

で

最強

すぎて

困る

Neko wo hirottara Seiju de
Inu wo hirottara Shinju de
Saikyo sugite komaru

著

マーラッシュ

Illustration: たび

ノア

生真面目な神獣・フェンリル。事情があり下界で暮らしている。食欲に忠実なマシロに呆れることが多い。

主な登場人物

ユート

本作の主人公。勇者の横暴に飽き飽きしてわざとパーティーから追放された冒険者。天界で暮らしていた経験から、並大抵のことでは驚かない。

リズリット

ムーンガーデン王国の王女。クーデターで混乱する王国に戻るため密航者として船に乗り込んだ。

マシロ

高飛車な性格の聖獣・白虎一族の掟に従い、天界から降りてきた。美味しい餌に目がない。

リステイヒ

ムーンガーデン王国の王弟。クーデターを起こし、王国を支配している。

レッケ

ムーンガーデン王国の騎士団長。レジスタンスを率いて現王政に反抗している。

グラザム

リステイヒの子。小心者。リズリットと結婚しようとして画策している。

ギアベル

ユートをパーティーから追放した勇者。傲慢な性格で、自分より強い奴がいることを認めたがらない。

プロローグ

「俺は自由だ！ 自由になったぞ！」

バルトフェル帝国の山奥へと続く道で、思わず叫んでしまう。

俺の名前はユート。

前世、日本人だった俺は二十歳の時に交通事故に遭ってしまい、女神であるセレスティア様のおかげによって、この世界アルセディアに異世界転生したのだ。

アルセディアで十五歳になった時、盗賊に襲われているバルトフェル帝国の公爵令嬢を助けたことによって、とある冒険者パーティーの一員に推薦されることになった。

断ると角が立つと思いつつ仕方なしに引き受けたが、そのパーティーのリーダーは厄介な人物だった。とにかく酷い扱いを受けたので、パーティーにいた時のことは思い出したくもない。

紆余曲折あつてパーティーから追放されることとなり、さらには帝国からも出ていけと言われたため、俺は今荷物を取りに自宅へと向かっている。

嫌なことから抜け出せたことを喜びつつ、俺はスキップをしながら街道を進んだ。

パーティー追放宣告を受けた二日後。

俺は人里離れた山奥にある自宅へと帰ってきた。

「三ヶ月ぶりだな」

異世界転生前を含めて考えても、この三ヶ月は人生最悪の日々だった。帝国からは追放されたけど、二度とパーティーメンバーと会わずに済むと考えればマシな方か。

もう厄介事に巻き込まれるのはたくさんだ。これからは平穏なスローライフを送りたいな。そもそも俺は帝国に……今住んでいる場所に愛着があるわけじゃない。

何故なら異世界転生してからの十四年間は、女神セレスティア様がいる天界で暮らしていたからだ。なんでも、子供の状態でこの異世界に放り出すのは申しわけないという理由らしい。

そのため、十四歳の誕生日を迎えた後の一年間しか、ここには住んでいないのだ。ふと上を見ると、森の木に一羽の鳥が止まっているのが見えた。

「おっ！ ホロトロロがいる」

ホロトロロは体長三十センチ程の大きさで、脂がのっけてとてもおいしい鳥だ。

「今日の昼ご飯にでもするか」

俺は左手に魔力を込める。そして異空間へと手を伸ばし、弓と矢を取り出した。

これは異空間収納いっくわんしゆうなうという魔法だ。自分で持ちきれない大きな荷物などを収納しておくことができるから、とても便利な魔法である。前世の世界では魔法なんてなかったから、初めて使った時は感動したものだ。体内にあるMPマンナポイントと呼ばれるものを消費することで、何もない所から火や水を出すことができるなんて、前世の記憶を持つ俺からすると奇跡としか言いようがない。

「後はこの弓矢で仕留めるだけだ」

俺は弓を引き絞る。そしてホロトロロに照準を合わせ、矢を放つ。

すると矢は猛スピードで飛んでいき、見事ホロトロロの首に当たった。

ホロトロロは矢が刺さったまま木から落下したので、急いで駆け寄り、今日の昼食を手に入れることができた。

俺は滅多に食べることができないホロトロロを入手したことが嬉しくて、笑顔で自宅へと向かう。

そしてホロトロロを手に入れた場所から五分もしない内に、丸太で積み重ねたログハウスの自宅が見えてきたので、ドアを開けて中に入る。

だが家の中を見た瞬間、ホロトロロを手に入れてご機嫌だった気分が一気に消え失せた。

「床に土……だと……」

この山奥に人が来ることなどない。少なくともここに住んでからの一年間は人に会ったことすらなかった。三ヶ月留守にしていたから埃があるのは理解できるが、土があるということは、誰かが俺の家に侵入したということだ。

俺は冷静に周囲の気配を探る。

すると台所の方から気配を感じた。

「ミイ……」

誰だ？ まさか人がいるのか？ いや、今の声って……

ゆつくりと台所に近づくと、そこには一匹の白い子猫が横たわっていた。

「なんだ猫か……驚かせるなよ」

白猫はこちらの存在に気づくと、ギロリと睨み付けてきた。

「そんな目をしないでくれ」

俺は敵意がないことを証明するため、白猫の頭を撫でる。

「ミイ……ミイ……」

「ん？ 声が弱々しいな。もしかしてどこか怪我でもしているのか？」

白猫を抱き上げて身体の隅々まで見てみる。

だが身体には傷一つなく、特に怪我をしている様子はなかった。

「それなら病気とか？」

さすがに病気だとまずいな。少なくとも俺には治すことができない。一旦街に降りて医者にみせるしかないか。

「ミイ……ミイ……」

白猫は変わらず弱々しく鳴いている。

「これは一刻を争うかもしれない」

俺は白猫を抱きかかえたまま、家の外へと向かおうとした。

しかしその時、信じられないことが起きた。

「お、お腹……空きました……」

「えっ？ ね、猫が喋ったぞ！」

「は、早く……ご飯……」

どうやらこの白猫は空腹のようだ。

だけ喋る猫か……まさか魔物じゃないよな？ 魔物は人に仇なす存在だ。助けたらまずいことになる。

……いや、まあもし魔物だったら倒せばいいだけか。

白猫を一旦地面に降ろす。

すると、白猫はある一点を見つめている。

どうやらさつき俺が狩ってきたホロトロが気になるようだ。

「そういえば猫は鶏肉が好物だったな。ちよつと待っててくれ」

俺は台所に向かい、ホロトロの血抜きと毛抜き、内臓の処理を行い解体していく。そしてササミの部分焼いて、白猫のもとへ持っていった。

「どうぞ」

「ミャア……」

白猫はササミを食べ始めた。

最初はゆつくりだったが、途中からガツガツとすごい勢いで口に入れていた。



余程お腹が空いていたのだろう。

でもなんで白猫はこんな所にいたんだ？ よくよく考えて見れば、この山奥に猫が一匹でいるなんておかしいよな。

まあ喋る猫だから、普通の猫とは違うとは思うけど……

そして白猫はササミを綺麗に平らげると、俺の肩に乗ってきた。

「わ、悪くない食事でした。一応感謝してあげます」

な、なんだこの上から目線の礼は。ツンデレというやつか？

「あ……うん。口に合ったならよかったよ。それじゃ俺は旅支度をするから君も家に帰った方がいいよ」

「仕方ありませんね。あなたにお世話されてあげましょう」

「ん？ いや、俺はもうここには戻ってこないよ」

「決してご飯がおいしかったからじゃありませんよ。勘違いしないでくださいね」

会話が噛み合っていないな。

まさかこの猫、話聞かない系か？

「私が何故喋るか、どうしてここにいるか気になりますよね？」

「いや、さっきも言ったけど俺はもうここを出ていくから」

「気になるって言うってください！」

白猫は俺の顔にすり寄ってきた。

今度はかまってちゃんか。この猫……いくつ属性を持っているんだ？

「はいはい。気になります」

「ふふ……そうですね。気になりますか……では教えてあげましょう。私は白虎、由緒正しき聖獣なのです！」

白猫は得意気な顔で、とんでもないことを口にしてている。確か、聖獣とは魔物とは異なり、人間に加護をもたらす存在だったはず。

「どうですか？ 驚きましたか？」

「なるほど……だから喋ることができたのか？」

「えっ？ それだけですか……」

何故か白猫はしょぼんとした顔をしている。もしかして自分は喋れる猫だからすごいと自慢したかったのだろうか。それなら少し悪いことをしたな。

だけど驚かなかったことには理由がある。それは……

「実は以前喋る動物を見たことがあるんだ」

「見たことがある!? この地上に聖獣は……まさか、天界！」

「天界のことを知ってるのか？」

「私はそこから来たのです」

天界のことを口にするつもりはなかったけど、相手が知ってるなら別だ。

天界には地上では見られない珍しい動物がたくさんいたから、この白猫もその内の一種なのだろう。

「これはなおさら私のお世話係にピッタリですね。今日からよろしくお願いします」

まさかこの白猫は地上で暮らしていくつもりなのか？

本当なら断りたいところだけど、以前天界にいた時は周りにお世話になった。そんな天界にいた聖獣だと知ってしまったからには、見捨てることはできないな。

「え〜と……まず名前を聞いてもいいかな？」

「名前ですか？ それは地上で行動を共にする人間につけてもらう決まりになっています」ということは、このままだと俺がつけることになるのか。

もしそうだとしても、今すぐには名前なんて考えつかないし、ここは他の話題に移ろう。

「どうしてわざわざ地上に降りてきたんだ？ 理由があるなら教えてほしい」

「わかりました。白虎族には十歳になると地上で暮らす掟おきてがあって、私も天界から降りてきたのですか……」

ここで白猫は言葉を止めて、何やら言いにくそうにしていた。

なるほど……どうして言いにくそうにしているのかわかったので、代わりに口にする。

「お腹が空いて、とりあえず家があったから侵入して食べ物をいただくとしたけど、何もなくて

力尽きたと」

「ち、違います！ 少し休憩していただいです」
ひとまず、地上に來た理由はわかった。

「なんだかこの子だけだと少し心配だな。やはりここは俺と一緒にいた方がいいみたいだ。
」わかった。これからよろしくな。え〜と……」

「名前はあなたが決めてください」

「やっぱ俺が考えるのか。」

「白い猫か……それに話し方からして雌メスだよな。それなら……」

「マシロなんてどうかかな？」

「マシロ……ですか。いいですね」

「どうやら気に入ってくれたようだ。」

「真っ白な猫だったからマシロにしたけど、安易なネーミングだと嫌がられないでよかった。」

「私の心が純粹じんすい無垢むくで真っ白だからマシロ……わかっていますね」

「なんだか俺が想像していたことと違うことを考えているようだ。」

「まあ本人は気に入ってくれているし、そういうことにしておこう。」

「そして、マシロは食事をとって眠くなってきたのか、ベッドで寝てしまった。」

「その間に俺は必要な物を全て異空間にしまう。」

しばらくして、旅の準備ができたのでマシロを起こすことにした。

「マシロ、マシロ」

「う〜ん……なんですか……私はまだ眠たいのです……」

「眠たいなら寝ていいから。でもベッドを持っていきたくらいから抱っこしてもいいか？」

「仕方ないですねえ……許可します……」

「真っ昼間からいいご身分だ。だけど猫は一日の半分以上は寝るって言うし、しょうがないか。」

「俺はマシロを抱き上げて、ベッドを異空間へとしまう。」

「な、な、なんですか今のは！」

「まどろんでいたはずのマシロが、突然大きな声を上げる。」

「ビックリしたぞ。いきなりなんなんだ」

「い、今ベッドが消えましたよね？ これは夢ですか？」

「夢じゃないよ。天界にいたなら神聖魔法しんせいまほうを知ってるだろ？」

「魔法には火・水・風・地・光・闇の属性魔法ぞくせいまほうと、神聖魔法がある。」

「魔法の才能があれば属性魔法のどれか、もしくは複数を使える可能性があるらしい。」

「神聖魔法は簡単に言ってしまうと属性魔法のパワーアップ版だ。その他に、属性魔法の中には存

在しない魔法もいくつか含まれる。その一つが今使用した異空間収納魔法だ。」

「もちろん知っていますが……女神セレスティア様か、天界でも上位の方しか使えない魔法じゃな

いですか！ 何故それが人間のあなたに……」

「直接セレスティア様に教えてもらったからな」

実際には異世界転生特典でセレスティア様から授かっただけだが、わざわざ言う必要はないだろう。

それにしても、聖獣であるマシロがこれ程驚くということは、やはり神聖魔法についてはなるべく隠した方がよさそうだ。

これまでは騒ぎになるかもしれないから神聖魔法は隠れて使うようにしていたけど、どうやらその行動は間違っていないかったらしい。

「私にできない魔法を使うなんて生意気ですが……これが私のお世話係だと思えば悪くないですわね」

「はいはい。それよりそろそろ行くぞ」

「わかりました」

わかったと言っても、マシロは俺の肩に乗るだけだった。

どうやらこのまま俺に運べということらしい。

まあ軽いからいいけど。

思いがけず天界の聖獣を家で拾うことになったが、まさかこの後も信じられないものを拾うとは、この時の俺には想像すらできなかった。

第一章

俺とマシロは、自宅から山の麓にあるカバチ村へと向かう。

途中森の中でマシロが三羽のホロトクを見つけたため、弓矢で射ち落とし、解体してから異空間へとしまった。異空間にしまっておけば時間が経過しないので、獲れたての味を楽しむことができるのだ。

それにしてもマシロは気配を感じるのが得意なのか？ それとも人間より遥かに優れた嗅覚を使ったのか……理由はわからないが、これからは獲物を見つけたことが楽になりそうだ。

「旅に出ると言っていましたけど、これからどこへ行くつもりですか？」

歩くことを一切せず、俺の肩に乗っているマシロが語りかけてきた。

「……決めてない」

「決めてない？ それはどういうことですか？」

これから一緒に旅をするなら真実を伝えないとまずいよな。

「実は帝国……この国から出ていけって言われて、まだ何も決めてないんだ」

「ま、まさか私のお世話係は犯罪者？ もしかして可愛い私もこのまま奴隷として……」

この駄猫は何を考えているんだ。世話をするのが嫌になってきたぞ。

「さつき仕留めたホロトクは俺が食べるとしよう」

「あつ！ 嘘です。ごめんなさい」

ホロトロの肉が相当気に入ったのか、マシロはすぐに謝罪してきた。
なかなか食い意地の張った聖獣だな。

これはおいしくない食べ物を提供したら怒られそうだ。

「ですが主として事情は知っておきたいですね」

「誰が主だ！」

「この美しき聖獣白虎であるこの私です」

天界の動物達はこんなに偉そうじゃなかったぞ。マシロが特別なのか？ ともかくこれから地上で暮らしていくなら、常識というやつを教えてやらないとな。

「それで？ どういうことですか？」

「えーと、三ヶ月前に盗賊から公爵令嬢を助けて——」

俺はマシロに帝国を追放された経緯を話し始めた。

◇◇

約三ヶ月前。

「あ、ありがとうございます……ございました」

俺は馬車を襲っていた盗賊を蹴散らした後、一人の少女からお礼を言われた。

その娘は、どうやらバルトフェル帝国の公爵令嬢のようだった。

フードを深く被っているため顔は見えなかったが、奥ゆかしい雰囲気を出しており、深窓の令嬢といった感じだったな。

「あ、あなたのような強いお方は初めて見ました。まるで本の中の英雄そのものですね。もしよろしければ——」

俺は公爵令嬢であるルルレーニャ・フォン・ニューフィールドさんに勧められて、あるパーティーに入るようになった。

そしてその三ヶ月後。

「貴様のような役立たずは勇者パーティーに必要ない！」

グラスランドの街にある中央広場で、俺は罵声を浴びせられていた。

目の前で喚き散らしているのは、つい先日勇者に認定されたギアベルだ。

ギアベルは、世界は自分を中心に回っているという考えの持ち主で、手柄を立てれば自分のおかげ、失敗したら俺のせいにするどうしようもない奴である。

だが生まれ持った才能と帝国の皇子という特権があるせいで、諫める者もおらず、我が儘に育ってしまったていた。

「街じゃ、こいつがいないと勇者パーティーはなんにもできないとか噂されているけど、そんなこ

とないしい」

「むしろ邪魔なのはユートでしょ？ なんの役にも立ってない」

「ギアベル様の判断は正しいと思います」

パーティーメンバーである魔法使いのファラ、アーチャーのマリー、騎士のディアンヌが口を揃えてギアベルの言葉を肯定する。

この三人はギアベルの恋人でもあるため、俺への擁護などは一切なかった。本来なら追放されて絶望に落とされるところだが、周囲に噂を流し、この状況を狙って作り出した者としては、ほくそ笑むしかない。横暴なギアベル達にうんざりしたので、俺はわざと追放されることにしたので。

だが感情を表に出すと、勇者パーティーを抜け出す計画に支障を来すかもしれないので、神妙な顔をする。

「そ、そんな……俺は一生懸命パーティーのために尽くしていたのに……」

「あれで？ 雑用すら満足にできないお前は俺のパーティーには不要だ！ 今すぐパーティーから出ていけ！」

「わ、わかった……」

よし！ 全て作戦どおり！

公衆の面前で宣言したんだ。もう取り消すことはできないだろう。

「なんだよ。噂は間違っていたのか」

「そうだよな。勇者であるギアベル様が役立たずのはずがない」

「役立たずはあのユートだったのか」

ギアベルは周囲の人達の声を聞き、満足そうに笑みを浮かべる。

後はギアベル達のもとから去るだけだ。

だけどこの時、予想外のことが起こった。

「勇者パーティーだけではない……お前は帝国からも追放だ！ 二度と俺達の前に現れるな！」

予定していないことを口にして、ギアベル達は去っていく。

ま、まじか……まさか帝国から追放されるとは思わなかった。ギアベルの憎悪の感情を舐めてたな。俺がいなきゃ何もできないと言われたことが、予想以上にプライドを刺激したようだ。

帝国の皇子に逆らったらそれこそ面倒なことになる。ここは大人しく従うしかない。

俺は少しだけ落ち込みながら、帝国から去る準備をするため、自宅がある山奥へと向かうのであった。



そして舞台はカバチ村に続く道へと戻る。

マシロが目を細めて、訝しげな顔で俺の方を見ていた。

「余計なことをして……バカですか」

「バカじゃない。予想が少し外れただけなんだよお」

「わざわざそのような小細工をしないといけないなんて……人間社会は面倒くさいですね」

「確かに……な」

生まれながら格差があったり権力争いがあったりする人間社会は、猫社会……じゃなくて白虎社会からすれば煩わしいのだろう。

「それより、これからどうするのですか？」

カバチ村はどちらかという帝国のやや西側にある街だけど、どこにでも行けるんだよな。

正直どの国に行くか決めかねる。

「できれば寒すぎる所と暑すぎる所は行かないでほしいです」

「う〜ん……そうなると今の時期、南は暑いから行くなら東か西、それか北だな」

確か北側に数日歩くと海があつて、船に乗れば南以外に行けるはずだ。

それに海に出れば新鮮な魚があるし、マシロも喜ぶだろう。

「とりあえずおいしい魚が食べたくないか？」

「おいしい魚？ いいですね」

「それなら北に行くでしょう」

「仕方ないですね。ユートに従いましょう」

食い意地が張っているマシロから反対意見は出なかつたので、北に行くことに決定した。

目的地が決まったことで、足取りが軽くなった俺達はカバチ村へと向かう。そしてもう少しで村に到着というところで、突然悲鳴のようなものが聞こえてきた。

「ひいひいっ！」

中年の男性が叫びながらこっちに向かってくる。

「なんですかあれは？」

「しっ！ マシロが喋っているのを見られるとめんどくさいことになるから黙っててくれ」

聖獣だと言っても信じてもらえなければ、魔物扱いされる可能性がある。極力人には知られない方がいいだろう。

「ニヤ〜」

マシロは俺の言うことを理解したのか、猫のふりをする。

「ま、魔物が！ あんたも逃げた方がいいぞ！」

男性の後方には、三匹の醜い容姿をした魔物……ゴブリンの姿が見えた。

このままだと男性は追いつかれてしまいそうだな。

「マシロ……俺の肩にしっかりと掴まるか、下に降りてくれ」

「ニヤ〜」

どうやら降りるつもりはないようだ。

それならこのままやらせてもらう。

「こ、殺されるぞ！ 早く！」

男性は俺の横を走り抜ける。

だがスビードはなく息も絶え絶えだ。とうとう男性は地面に倒れてしまった。

もし俺がここから逃げれば、数秒後には確実に殺されてしまうだろう。

俺は腰に差した剣に手を置き、迫ってくるゴブリンに向かって駆け出す。

「ギイギイ！」

「ウヒャー！」

ゴブリンは言葉にならない声を出し、笑みを浮かべていた。

獲物が一匹から二匹に増えたと喜んでいるようだ。

しかし思いどおりにはさせない。

ゴブリン達とすれ違い様に俺は剣を抜く。

居合一閃で胴体をなぎ払うと、三匹のゴブリンは断末魔の叫びを上げることもできず、その場に崩れ落ちた。この程度の相手なら、俺にとつて倒すのは造作もないことだ。

「ふふん……さすがは私のお世話係です。及第点を上げましょう」

マシロが得意気に小声で人間の言葉を喋り始めた。

反応すると男性におかしく思われるかもしれないので、とりあえず無視しよう。

「い、一瞬で……ゴブリン達を……」

男性は信じられないといった表情で、こちらに視線を送ってきた。

前から薄々思っていたことだが、俺の剣技は相当高いレベルにあるようだ。勇者パーティーにいた頃、この世界の人間がどれほど強いのか観察していたが、勇者と呼ばれたギアベルでさえ、俺より弱く感じた。

だからこの男性が驚くのは当たり前のことなのだろう。

「た、頼むあんた！ 村が……村が襲われているんだ！ 助けてくれ！」

「村が襲われている……だと……」

俺は必死にしがみついてくる男性の願いを聞くため、しゃがみ込んだ。

「村の近くに洞窟どうくつがあつて……そこにゴブリンが住みついたんだ」

ゴブリンは群れをなす種族なので、一匹や二匹では収まらず、そこそこの数があると考えた方がよさそうだな。

「それで……ちようど村に滞在していた勇者パーティーが討伐してくれると言っていたが、振り返りにあつてしまつて。そして巢を攻撃したことでゴブリンの怒りを買ひ、村が……村が……」

勇者パーティー？ まさかギアベル達じゃないかな？

この世界には国に認められた勇者パーティーがいくつもある。

勇者パーティーは国や街からの要望で魔物退治などを行う代わりに、様々な特権が認められて

いた。

まあそもそもギアベルが帝国の皇子だったから、俺達のパーティーにはあまり関係がなかったけど。

「あの勇者パーティーは怪しいと思ってた。前金を要求してきて村で好き放題飲み食いしたあげく、ゴブリンの討伐に失敗したら逃げ出して……たぶんあれは勇者パーティーを騙った偽物だったんだ」

偽物か。それならギアベル達ではないな。もし帝国内でギアベルと遭遇してしまったら、追放されたお前が何故ここにいると因縁をつけられそうだけど、その心配はなさそうだ。

「とりあえず話はわかりました。後は俺に任せてください」

「ほ、本当か！」

「だからあなたはどこかに避難してください」

「ありがとうございます……ありがとうございます！」

こうしている間にも襲われている人がいるはずだ。

俺は立ち上がって、男性が示した村の方角に足を踏み出す。

ここからならすぐに村に到着することができるだろう。

「あなたの……命の恩人であるあなたの名前を教えてください」

「俺はユートです」

背中から聞こえる声に答えて、俺はカバチ村へと向かう。

そして数分もしない内に村が見えてきた。

「ひどい有り様ですね」

マシロが口にしたとおり、田畑は荒らされ、家は燃やされていて、そこら中にゴブリンの姿が確

認できた。

「喋ると他の人に聞かれるぞ」

「大丈夫です。周囲に人の気配はしません。既に逃げているのかもしくは……」

死んでいると言いたいのだろうか。だがこの光景を見るとあながち間違っではないなさそうだ。

「安心してください。北の方から人の気配がすると風が教えてくれました」

「風が？」

「はい。私は風属性の魔法が得意ですから」

どうやらホロトクを見つけたのも、その風魔法の可能性が高いな。

それにしても人が……いや、猫が悪い。さっきの言い方だと村人はもう死んでいる的な感じだったぞ。

マシロを問い詰めてやりたいところだが、今は時間がない。早くゴブリンを討伐しなければ、俺の想像したとおりになってしまう。

「それにしてもゴブリンの数が多いな」

確認できるだけで、少なくとも三十四以上はいそうだ。

「ここは私に任せてください。ユートは人間がいる北の方をお願いします」

「大丈夫なのか？」

「誰に言っているのですか？ 白虎の力を甘く見ないでください」

出会った時、てっきり狩りができなくて腹を空かせていると思っていたが、どうやら違うようだ。

「手始めに前方にいるゴブリンを蹴散らして見せます。ユートはその間に北へ向かってください」

「わかった」

マシロは自信満々な様子だったので、任せることにしよう。

「行きますよ。風切断魔法」

マシロが魔法を唱えると、風の刃がゴブリンに向かって放たれる。

そして風の刃はゴブリン二匹を切り裂き、あつという間に倒してしまった。

「どうやら腕に自信があるのは本当だったみたいだな」

「初めからそう言ってます。それより早く行った方がいいですよ。北には一匹だけすごく大きな魔物がいるようですから」

「わかった。それじゃあ後は任せました」

俺はマシロの実力なら安心してこの場を任せられると判断し、カバチ村の北側へと向かった。

「くっ！ 思っていた以上に数が多いな」

北へ向かっている最中も二十四程のゴブリンを剣で斬り捨てた。だけどまだ多くのゴブリンの姿が見える。

「これは偽物の勇者パーティーがやられたのも頷けるな」

だが今は立ち止まっている暇はない。早く村人達がいる所に向かわないと。

「ギイギイ！」

「ウギヤアッ！」

しかしその道を塞ごうとしているのか、ゴブリン達がこちらに迫ってくる。

「邪魔だ！」

だけどゴブリンごときが何匹来ようが、天界で鍛練していた俺には足止めにはすらならない。

駆けながらゴブリンを倒し進んでいくと、突如人の声が聞こえてきた。

「だ、誰かメイを助けて！」

俺は声が聞こえてきた方へと進む。

そこには俺の倍以上の体躯を持ったゴブリンがいた。そして、そこにいたのはゴブリンだけではない。ゴブリンの足元には、小さな女の子が地面に座り込んでいたのだ。

巨大なゴブリンは手に持った鉄のこん棒らしき物を振りかぶる。

「い、いや……」

女の子は怯えた表情で、恐怖のためか声をうまく出せないでいた。
このままだと女の子が潰されてしまう！

俺はさらにスピードを上げて女の子のもとへと駆ける。

巨大なゴブリンのこん棒が女の子に向かって振り下ろされた瞬間、間一髪のところまで剣で受け止めることに成功した。

なんとか間に合ったか。

だがゴブリンの力が強すぎて、押し返すことはできなそうだ。

「あ、あ……」

「だ、大丈夫……このゴブリンは俺がなんとかするから……立てるかな？」

まずは女の子を安全な場所に避難させることが優先だ。できれば自分で立って逃げてくれると助かるので、俺は背後にいる女の子に優しく問いかけた。

「あり……ありがとう。うん……立てるよ」

「よかった。それじゃあ村の人の所まで走るんだ」

「うん」

少しは恐怖が薄れてきたのか、女の子はこの場から離れようと立ち上がる。だが巨大なゴブリンはそれを許さなかった。

「グワアオッツッ！」

「キヤアアアッ！」

女の子を逃がさないためか、巨大なゴブリンが咆哮を上げる。

すると女の子は恐怖で悲鳴を上げ、再び地面に座り込んでしまった。

こいつ……ふざけたことを。

魔法を使えばこの状況を打破できるけど、少しでも気を抜けばこん棒が俺と女の子を押し潰すだろう。

そうなると、やはり女の子には自力で逃げてもらえないな。

「突然現れた奴を信じて言う方が無理だと思うけど、君には指一本触れさせない。だから勇気を出して立ち上がってくれ」

「……うん……メイ……お兄さんのこと信じる。頑張るよ」

「いい子だ」

メイは再び立ち上がり、この場を離れようとする。

だがさつきと同じ様に、巨大なゴブリンは咆哮した。

「グワアオッツッ！」

しかしメイは止まることなく、村人のもとへと向かう。

それは、俺を信じてくれたこともあるが、メイが両手で耳を塞いで咆哮が聞こえないようにしていたからだ。賢い子だな。

さて、後は俺がここから逃れるだけだ。

俺は不意に力を抜くと同時に、バックステップをしてこん棒から逃れる。するとこん棒が俺のいた地面を破壊する。

「すごい力だな」

大きなクレーターができていぞ。

あれをまともに食らったら一撃で殺られてしまう。

それにしても……よく見るとこのゴブリンはただのゴブリンじゃないな。ゴブリンの王様……ゴブリンキングだ！

力、スピード、全てにおいてゴブリンを優に超えており、Aランクの魔物だ。

魔物の強さはSS、S、A、B、C、D、E、Fランクに分かれている。上から三番目のランクだから相当強いことが窺える。ちなみにAランクの魔物をいくつか狩ることができれば、勇者パーティーとして認められるのだ。

これは偽物の勇者パーティーは負けて当然だな。

このゴブリンキングを狩ることができるパーティーは、そう多くないだろう。ましてや個人で狩る者など一握りしかないはずだ。

「グアアアアッ！」

ゴブリンキングは自分の攻撃がかわされて腹が立ったのか、怒りの咆哮を上げていた。

そして俺を見下ろし、余裕の表情を浮かべている。負けるなんて微塵みじんも思っていない目だな、あれは。

実際力では負けていそうだけど、剣の技術と魔法ではこちらが上だ。

実は自分が淘汰とうたされる側の者だということを教えてやろう。

「神聖セイクリッド身体強化魔法」

俺は魔力を左手に込めて、自分自身に魔法をかける。

これは力やスピードを強化する付与魔法だ。魔力を込める量によって強化する量を変えられる。

今回は相手を圧倒するため、全力でかけさせてもらった。

付与魔法のおかげで俺の身体には今、力が漲みなっている。

これならゴブリンキングに負けるはずがない！

「グガアアッ！」

ゴブリンキングは怒号を上げながらこちらに接近してきた。

そして先程と同じ様に鉄のこん棒を振り上げ、こちらに向かって振り下ろす。

鉄のこん棒が風を切り裂き、俺の頭に迫ってくる。

だがそのような攻撃を食らうわけにはいかない。

俺はこん棒に合わせて、剣を横一閃になぎ払う。

剣とこん棒がぶつかり合うとけたたましい金属音が辺りに響く。そして俺の剣によってこん棒は

簡単に弾かれた。

「ガアアッ！」

ゴ布林キングはまさか自分の攻撃が防がれると思っていなかったのか、イラつきを見せながら連続でこん棒を振り下ろしてきた。しかし俺は全ての攻撃を剣で弾く。

力は強いが行動パターンは単調だ。動きを読み、剣で弾くことは容易い。

そしてゴ布林キングは攻撃をする度に、少しずつ威力が弱まっている。

おそらく俺の剣の威力によって手が痺れているのだろう。

そして終いにはこん棒を持つことができず、地面に落としてしまった。

「お前の時間はもう終わりだ」

俺は勢いよく飛び上がり、こん棒を失い隙だらけとなったゴ布林キングの首に剣を振り下ろす。するとドスンと首が地面に落ちた。

地面に着地した俺の前で、絶命したゴ布林キングの大きな体躯はズドンと地面に倒れたのであった。

「ふう……なんとかなったな」

後は残ったゴ布林達を掃討するだけだ。

だけどリーダーを倒されたせいとか、ゴ布林達が敗走し始めていた。

逃がすまいとしたところで、誰かの声が聞こえた。

「あ、あの！ 妹を助けていただきありがとうございます！」

「お兄ちゃんありがとう」

振り返ると、俺と同じ年くらいの女の子が深々と頭を下げている。

そして、その隣にいたメイちゃんが俺に突撃してきたので受け止める。

「無事でよかった」

「お兄ちゃんが助けてくれたからだよ」

メイちゃんが嬉しそうに上目遣いで見つめてくる。

本当によかった……この笑顔が守れて。

もう少し遅れていたらと思うとゾツとする。だけど危機はまだ去ったわけではない。

俺はメイちゃんを優しく引き剥がす。

「まだ村を襲っている魔物がいるから、お兄ちゃんちょっと行ってくるよ。二人は安全な所に隠れて」

「うん」

「わ、わかりました」

二人が少し大きな家に入ったのを確認して、俺はゴ布林達の討伐を再開する。

だが既にほとんどのゴ布林達は戦意がなく、村の東側に逃走していた。

そのため逃げ遅れたゴブリン達は難なく狩ることができた。

「ユート」

突如背後からマシロが現れる。

そして定位置となりつつある俺の左肩に乗った。

「ゴブリン達が逃げていきますね」

「たぶんリーダーを倒したからだと思う」

「どうしますか？ 追いますか？」

見逃したらいずれまた村を襲うことは目に見えている。ここは全滅させた方がいいだろう。

「ああ、このまま追撃するぞ」

俺とマシロはゴブリン達を追って、カバチ村の東側へと向かう。

そして俺の剣とマシロの風魔法で、逃げるゴブリン達を倒していると、ある異変に気づいた。

「おかしいですね」

「そうだな」

俺はマシロの言葉に同意する。

何故なら俺達が向かっている方向に、ゴブリンの死体が転がっているからだ。

もちろん俺達が倒したわけじゃない。

「誰か俺達以外に戦っているのか？ それとも偽勇者パーティーが倒したものとかな？」

「いえ、風は何も言ってないですね。もしかしたら巧妙に隠れている可能性もありますが……それと死体は新しいです。偽勇者が倒したものではありませんと思います」

俺は一度立ち止まり、ゴブリンの死体を確認してみる。

するとゴブリンの傷口が凍りついていることがわかった。

「誰かがゴブリンと戦っているのは間違いないさそうだ」

「私達の味方ということですね」

「それはわからないけど」

「敵の敵は味方と言いますよね？ 私の野生の勘がそう言ってます」

聖獣の勘なら信用はできるものなのか？

とにかくそいつがゴブリンを倒していることは間違いないから、俺達にとって悪い状況じゃないと考えよう。

俺とマシロは死体を横目に、逃走しているゴブリンを追いかける。

するとゴブリン達が洞窟に入っていくのが見えた。

「あれが村の人が言っていたゴブリンの巣か」

「なんだか薄気味悪い所です」

「それならマシロはここで待っていてくれ。俺一人で行ってくるよ」

「確かに洞窟に入りたくないという気持ちはありますが、ユートだけ行かせるような薄情者ではあ

りませんよ」

意外にも俺のことを考えてくれてたのか。

世話係世話係と言っていたから、マシロは自分優先だと思っていた。

「いや、一人で行かせまいとしてくれるのは嬉しいけど、洞窟で背後から襲われたら嫌だなと思って。マシロはここに残って、洞窟に入ろうとしているゴブリンを退治してほしい」

「それならそうと早く言ってください。わかりました。仕方ないのでその役目は私が担いましょう。ですがその前に……あちらの草むらで、ゴブリン以外の誰かが倒れています」

「えっ？」

突然マシロが予想もしていなかったことを口にする。もしかして風の方で周囲の様子を探知したのだろうか。

ゴブリン以外の何者かが倒れている。それはゴブリンを倒した人物なのか？ とりあえずマシロが言う草むらを確認して見よう。

「呼吸が荒いですね。あまり状態はよくなさそうです」

「わかった。俺が見てくるよ。マシロはここで待っていてくれ」

ゴブリン以外の魔物の可能性もあるので、危険に対処できる俺だけでいいだろう。

俺は倒れている者を確認するため、草むらをかき分けていく。

するとそこには、血を多く流した黒い子犬が倒れていた。

「子犬？ ゴブリン達にやられたのか！」

地面が赤く染まっている。むしろこの状態で生きているなんて奇跡だ。このままだとこの子犬は死んでしまうぞ。

「犬ですか？ 私とは相性がよくありませんが助けて……えっ？」

子犬と聞いて危険がないと思ったのか、マシロがこちらに向かってきた。だけど子犬を見た瞬間、何故か驚きの表情を浮かべている。

「この子犬のこと知ってるのか？」

「……私も直接会ったことはありませんけど、この犬は神獣しんじゅうのフェンリルです」

「神獣……だと……」

どう見てもただの犬にしか見えないが……

確か神獣は女神の使いであり、聖獣と同じく、人に加護をもたらす存在と言われている。普通は天界にいる生物で、このような所においていい存在じゃない。本当に神獣なのか？

俺はチラリとマシロに視線を向ける。

だけだただの猫にしか見えないマシロが白虎だから、そういうのもあるのかな？

「なんですか？ その目は。何か失礼なことを考えていますね？」

「いや、そんなことない。それよりこのフェンリルを助けないと」

野生の勘か？ 鋭い猫だな。

俺はフェンリルに向かって左手の掌を向け、魔力を溜める。
「セイクリッドヒール神聖回復魔法」

魔法を解き放つと、フェンリルの身体が光り輝き始める。

セイクリッドヒール神聖回復魔法はどんな傷も一瞬で治してしまう回復魔法だ。

おそらくこれでフェンリルの命は助かるはずだが……

セイクリッドヒール神聖回復魔法の光が収まる。

すると閉じられていたフェンリルの目が、ゆっくりと開いていく。

「こ、これは……セレスティア様のお力……」

子犬が人間の言葉を口にする。

これで決まりだな。どうやら目の前の子犬はマシロの言うとおり、神獣のフェンリルで間違いないようだ。

「こんな所で何をしていますか？」

「あなたは……白虎？」

「私のお世話係があなたの命を救ってあげたのです。感謝してください」

マシロは自分が助けたわけじゃないのに偉そうだな。

「助けてくれてありがとうございます」

フェンリルは深々と頭を下げてくる。

どうやらフェンリルはマシロと違って素直なようだ。

「お礼をしたいですけど、今はゴ布林キングをなんとかしないと。さっきは負けたけど、次こそは必ず勝ってみせます」

どうやらフェンリルの傷は、ゴ布林キングにやられたもののようだ。

「ゴ布林キングなら私のお世話係が倒しました」

「えっ？ それは本当ですか？」

「ええ……そして残りのゴ布林を倒すために洞窟へ行こうとしたら、あなたを見つけたと言っけです」

「そうですか……だったら僕も連れて行ってください」

子犬に見えるけど、神獣のフェンリルなら戦力になるだろう。こちらとしても断る理由はないが……

「ここに来る途中で傷口が凍っているゴ布林を見たけど、それは君がやったのかな？」

「はい」

それなら実力的にも申し分なさそうだ。

「わかった。それじゃ俺についてきてくれ」

「わかりました」

そして当初の作戦どおりマシロはここに残り、俺はフェンリルを連れて洞窟の中へと向かう。

洞窟に入ると段々入口からの光が届かなくなり、視界が暗闇に遮られる。

「これだと見えませんよね。灯魔法」

フェンリルが魔法を唱えると俺達の前に光の玉が現れ、周囲を明るくしてくれた。

「光魔法も使えるんだね」

「はい。水魔法程得意じゃないけど」

ただの子犬と思って近寄ったら、とんでもない目にあわされそうだな。

「そういえば僕を治療してくれた時、セレスティア様と同じ気配を感じました。あなたは何者ですか？」

「俺は天界にいたことがあって、セレスティア様に神聖魔法を教わったんだ」

「セレスティア様に魔法を!? それはとても羨ましいですね……僕は……」

フェンリルは途中で言葉を切ற்றுつむいてしまう。何か落ち込む理由があるのだろうか。だがそのことを考えている暇はなかった。

「この先にゴブリンがいます」

「わかった。君が魔法で攻撃をして討ちもらした奴を俺が倒す。それでいい？」

「はい」

先に進むと、灯魔法の光に誘き寄せられた数匹のゴブリンが迫ってきた。

「行きます！ 氷柱槍魔法」

フェンリルが声高に魔法を唱える。

すると五本の氷の槍が、ゴブリンへと放たれた。

氷の槍のスピードは速い。これは簡単には避けられないだろう。

「グキヤアツ」

俺の予想どおり、ゴブリンは氷の槍をまともに食らう。

そして断末魔の叫びを上げるとその場に崩れ落ちた。

「俺の出番はなかったね」

「ご、ごめんなさい」

「いや、怒ってるわけじゃないんだ。やっぱり神獣と呼ばれるだけあって強いね」

「……僕なんかまだまだです。ゴブリンキングに手も足も出なかったし」

「そういえばフェンリルは何故ここにいたんだ？ セレスティア様が天界の生物は基本地上には降りて来ないと言っていたけど……」

何か事情がありそうだけど、今はゴブリンを倒すことに集中した方がよさそうだな。

「また来ます」

「わかった」

そして俺達は足を進め、洞窟内にいるゴブリンを全て倒すことに成功した。

「これで終わりかな」

「はい。近くには生物の匂いは感じないです」

匂い？ やはりイヌ科だから嗅覚がとても優れているのか？

「それにしてもすごい剣技ですね。ゴ布林キングを倒したのも領けます」

「そうかな？ あまり人と比べたことがないからよくわからないけど」

「羨ましいです。僕にもその強さがあれば……」

なんとなくフェンリルは強さに執着があるように感じる。もしかしてそれが地上にいる理由なのか？

少し気になるから洞窟を出たら聞いてみるかな。

「あっ！ あっちの方に何かありますよ」

突然フェンリルが駆け出した。

その方向に視線を向けると、キラキラと光る物が見えた。

「こ、これは……」

そこには金や銀、宝石などの財宝があった。

「すごいですね」

マシロが感嘆している。パッと見だけど、一生遊んで暮らせる額はありそうだな。

ゴ布林達がどこからか集めてきたのだろうか。

「ともかくここに置いといてもしょうがないな」

俺は異空間に財宝を収納した。

これでいつでも財宝を取り出すことができる。

「あの……」

異空間に財宝を収納し終わった時、背後からフェンリルに話しかけられた。

「あなたの名前を覚えてもらってもいいですか？」

「ああ……まだ名乗ってなかったね」

ゴ布林を倒すことを優先してしまい、大事なことを言い忘れていたし、聞き忘れていた。

「俺はユート……君の名前も覚えてもらってもいいかな」

「僕には名前がありません。自分の主と認めた人物に名前をつけてもらうのが、フェンリル一族の風習です」

マシロと似たような理由だな。天界の聖獣や神獣にはそういう決まりがあるのかもしれない。

「ぜひ、ユートさんに名前をつけてほしいというか……」

「それってこれから俺についてくるってこと？」

「……はい。もしユートさんがよければ」

そうなると白虎とフェンリルが俺のパーティーメンバーになるのか。

強すぎてとんでもないことになってきたな。

「別に構わないけど……ただ俺はこの国から出ていなくなっちゃならないんだ。それでもいい？」

「は、はい！ 大丈夫です！」

フェンリルは嬉しそうに頷く。

そこまで喜ばれたら、断ることはできないな。

黒いフェンリルの名前か……こういうのは苦手だけど俺がつけるしかないんだよな。

確かフランス語でノアールは黒……でもそれだと少し安直だから短くして……

「名前は……ノアでどうかな？」

「ノアですか……はい！ とても素敵な名前だと思います」

よかった。どうやら喜んでくれたようだ。

「それじゃあマシロも待つているから、外に出ようか……ノア」

「はい」

こうして俺は新しい仲間、ノアを加えて洞窟の外で待つマシロのもとへと向かった。

「遅かったですね」

「悪い悪い。でも洞窟の中にいるゴブリンは全て倒したぞ」

俺達を待ち構えていたマシロが、少し不機嫌そうに軽口をたたいてきた。

「それに洞窟の奥ですごい物も見つけたんだ」

「すごい物ですか？」

俺は異空間から洞窟で見つけた金や宝石を見せる。

「こんな物、私には価値がありませんね。ユートの好きにしてください」

「僕も必要ないので、ユートさんが使ってください」

「そうなの？ わかった」

確かに猫と犬が財宝を持っていてもしょうがないよな。

ただこの財宝の使い道は既に決まっている。マシロとノアの許可も得られたので、好きに使わせてもらおう。

「あの……マシロさん」

「なんですか？」

「僕もユートさんと旅をさせてもらうことになったので、よろしくお願いします」

ノアが深々と頭を下げると、マシロはため息をつく。

「やはりそうになりましたか。お世話係が決めたなら、私はとやかく言うつもりはありません。名前もいただいたのでしょうか？」

「はい。ノアと言います」

「私はマシロ。仕方ないからこのパーティーの決まりごとを教えてください。まずは私には絶対服従であること」

「おいおい。この駄猫は何を言い出すんだ。ノアが新入りなのをいいことに自分ルールを押しつけるつもりか？」

「それと自分の命を大切に、仲間を裏切らない」

俺はマシロを止めようとしたが、少しいいことを言ったので様子を見ることにする。

「困ったことがあったら仲間に相談する。私はあなたの事情をなんとなく理解しています。一人で先走らないようにしてください」

事情？ もしかしてそれはノアが地上に来たことと何か関係があるのか？

「見た目が少し違うだけで…神の使いと呼ばれたフェンリル一族も心が狭いですね」

「それに僕は落ちこぼれだったから…」

なんとなく今のマシロとのやり取りで、ノアの事情がわかった気がする。確かフェンリルの毛は神々しい白色をしていたはず。しかしノアの毛は漆黒という言葉が似合う色だ。やれやれ…そのくらいのことと差別するなんて、マシロの言うとおりが狭い一族だな。いや、人間も似たようなことをしているから何も言えない。

なんだかこの場の雰囲気少し重くなった。

だがそんな暗い空気をマシロの言葉がぶち壊す。

「それはさておき。一番重要なのが…毎日新鮮な魚を私に献上することです。わかりましたか？」

「はい！」

「わかりましたかじゃないよ。ノアも最初と最後に言ったことは気にしないでいいから」

「えっ？」

珍しくいいことを言ったと思ったら、結局は自分の要望をノアに押しつけていただけだった。

「何を言っているのですか。その二つが一番大切なことですよ。お世話係も毎日私に魚を献上するのです」

「はいはい。それより早く村に戻るとしよう。二人とも行くぞ」

「あっ？ 待つてください。まだ話は終わっていません」

こうして俺はマシロの無茶な要望を聞きつつ、カバチ村へと戻った。

村に戻ると、メイちゃんやメイちゃんのお姉さん、最初に会った中年男性や大勢の村人達に迎えられた。

「お、おお…ユートくんか。さっきは助かったよ」

「ゴブリンは倒しました。これでもう安全ですよ」

「そうか…ありがとう」

「ゴブリンがいなくなっただのになんだか皆の表情が暗いな。」

何かあったのか？

「ねえねえ村長さん」

メイちゃんが、俺達が最初に会った中年男性に話しかける。

村長？ あの人が村長さんだったんだ。

「メイ達お引越ししなくちゃいけないの？」

「ああ。ユートくんのおかげで死者は出なかったけど、村がこの有り様だからね」

周囲を見ると黒煙が立ち上っていた。

「ゴ布林達に田畑を荒らされ、家は燃やされたことが見てわかる。」

「偽勇者にお金を渡してしまったし、もう村を修復するお金もないんだ」

「そうなの……メイ、お家から離れたくないよ」

「このままここにいっても、死を待つだけだ。わかってくれ」

メイちゃんは泣き出してしまい、村人達は悲痛な表情を見せている。

「ニャー」

「ワン」

マシロとノアが俺に向かって、何かを訴えるように鳴いている。

わかっている。俺も最初からそのつもりだったから。

二人の気持ちも俺と同じでも嬉しい。

「村長さん。村の復興にはこちらを役立ててください」

俺は異空間から洞窟で手に入れた財宝を取り出す。

「なっ！ 金や宝石が……どこから出したんだ！」

「これは洞窟の奥で発見した物です。おそらくゴ布林が集めていたのかと」

「こ、これを私達にしてくれると言うのか」

「はい。それからゴ布林の素材も全て村のために使ってください」

「いや、だが……これらの素材は全てユートくんのものだ。受け取れないよ」

村長さんは俺のことを思ってくれているのか、財宝を受け取ってくれない。

だが、実はこれは恩返しでもある。

天界から地上に降りて山の中で暮らし始めた時、この村では生活用品を仕入れたり、時にはおばあちゃんやおじいちゃんから野菜をタダでもらったりとお世話になった。感謝の意味も込めて受け取ってほしい。

「ねえ村長さん、メイ達お引越ししなくてもいいの？」

「そ、それは……」

村長さんはメイちゃんの問いに困惑している。

村長さんも本当は額きたいのだろう。だから額けるように俺が後押しをする。

「そうだよ。メイちゃんはこれからもカバチ村に住めるんだよ」

「本当？ よかったあ。メイ、皆のことが大好きだから、ここにいられてとっても嬉しい」

泣き顔だったメイちゃんから笑みが溢れる。

メイちゃんや村の皆を笑顔にできるなら、財宝を渡すことなど大したことじゃない。